

黒髪のみだれちかみ朝窓をあけてもくらし空のくもりて

夏月涼

わが庭のすゞしき月にふかしけりそ、のかされて閨に入るまで

野撫子

いとほしくおもはる、かな刈りてほす夏野の草にまじる撫子

朝蟬

實になれる桃の木の葉がくれにあした涼しく蟬のなくなり

茸狩

なが、らぬ秋の日かげを惜むかなくさびらとりて遊ぶ山路に

山中瀧

山かげの岩根によりて見つるかな名もなき瀧としづはいへども

鄰

しろしめすみ國のうちとなりけり鄰とおもひしとりの林も

旅宿夢

大前にさぶらふとみるゆめのまは旅のやど、も思はざりけり

犬

乗る人は見しらずながら大路ゆく車にそひてはしる犬の子

いつくしむ御心しりて犬の子も大前さらず遊びたはる、

歌

世にひろくしげるも嬉し人みなのみことをとねのやまと言の葉

玉

大前のみたなにすゑてみそなはす玉にはちりもか、らざりけり



絲

竹垣にぬれたるいとをほしてけりしづのをとめが手染なるらむ

飛行機

たくみなるわざの開けて神ならぬ人も天とぶ世となりけり

海上舟

うしづせの山かげちかくつどふなり沼津の海のあまのつり舟

子

年たらでまなびのそのに入らぬ子も千代にやちよとうたふ御代かな

可美眞手命

銚とりてよるも御垣にたちしこそ近きまもりのはじめなりけれ

思往事

からくさのみだれは夢となりけりすめらみ國の風になびきて

寄山祝

天つ日の光をうけて年々にしげりそふらむ新高の山

をりにふれて

日のもとのかくにひろざるのみりぶみ神も嬉しとうけたまふらむ  
おほけなき君が惠のかしこきは忘るゝまなし老いにける身も  
うつしゑのうへにみるだにいたましや水にひたれる川づらの里

沼津にて

みそのふは雪さむけれどすくよかに君ましますときくぞ嬉しき  
たまものゝその品々に大君のふかきみこゝろこもるかしこさ



明治四十四年

禁庭花

みそのふの花はさけどもしづかにはみそなはす日ぞすくなかりける  
大前にまゐりおくれぬわたどの、窓よりみゆる花をめでつ、

遅日

きこしめすこと多ければ春の日もなほ短しとおぼしめすらむ

苗代

苗代の水田に花ぞ浮びたる蒔きしゆだねは底に沈みて

田家暮春

小山田の里のかきねの春深みしろくなりぬるやまぶきの花

夏川

ふきわたる岸の柳の風うけて里の小川に瓜あらふ見ゆ

朝顔

あさがほのはな見むためにうれしきは窓の日影の曇るなりけり

蟲

秋草の花のまがきの蟲の聲思ありとはきこえざりけり

鈴蟲

やちくさのはなのまがきの夕露に籠より放ちしすゝむしのなく

簾外月

老が身は風をいとひて玉だれのすごしにのみも月をみるかな  
をりにふれて



ふるごとを口ずさみつ、軒近き柱によりて月をみるかな  
氷

このあした池の緋鯉もかくろひて水あるかぎりこほりはてたる

寒月照梅花

みかきもる人をぞおもふ風さゆる霜夜の月に梅の花みて

野水

魚すくふ子らにことばをかけつ、も野川のはしをわたる旅人

堤

ふりつゞく雨はれそめて里川のつ、みつくろふしづぞむれたる

井

大君のおもの、爲のほり井には清き水のみわきあがらなむ

池邊松

いろくづもよりて遊べり松のかげさやかにうつる池のみぎはに

曉鳥

紅葉山からすなきたつ聲のうちわが窓のとも白みけるかな

行路犬

をぐるまのまへをよこぎる犬の子は危きことをしらずやあるらむ

櫛

くしのはに餘りし昔しのぶかなすくなくなれる髪をときつ、

夕眺望

うちわたす市のちまたのともし火のかげにぎはひてくる、空かな

海上眺望



朝づくひきらめきわたる波の上に船こぐ人のかげもうつれり  
くれ竹の葉山の海は風なぎてたて石ちかく船のよりくる

寄水祝

わが君のうぶゆとなりし祐の井の水は千代までかれじとぞ思ふ

寄國祝

天つ日のてらすが如く隈なきはすめらみくにの光なりけり

明治四十五年

惜落花

みいとまのあらむ日またで櫻花をしくも風にちりみだれつ、

夕蛙

水ひかぬ庭にもすむか夕月夜かはづのこゑのちかくきこゆる

大正二年

波のうへの月

すゝみせし軒にもかげのさしぬらむ沼津の海のなみの上の月

残紅葉

こがらしのふきしく庭のもみぢにもまだ色あせぬ枝はありけり

麻

おるはたの絲にせむとや畑道に里のをとめが麻をほすみゆ

山館松

世に遠きわが山松も大君の千代よばふ聲はかはらざりけり



あしひきの山下庵の松みてもねがふは君が千年なりけり

寄天祝

ひとむらの雲もかゝらぬ空を見てわが君が代をいはふ今日かな

大正三年

社頭杉

あらたまの今年を千代のはじめにていやさかゆらむ伊勢の神杉

明治二十三年十月二十六日といふ日茨城のあがたへみゆきせ  
させたまふこは近衛兵の演習をしたしく御覽ぜさせ給はむと  
てなりけりみづからも従ひ奉るべくかねておほせごとありし  
かばいとうれしくていでたつこの大御代ならずばいかで女の  
身にてかゝることを見むと思ふにおのづから心もいさみたち  
てうちゑまれぬ御車上野の停車場にとゞまるやがて樓の上に  
ぞのぼらせたまふ東宮にも御送りにとくより参りたまへり大  
后宮よりも典侍幸子御使にまゐりてあつきおほせ言ども奏す  
みづからもかしこき御言葉うけたまはるかくておとゞをはじ  
め送り奉る人々多かるをもらし給はず御前近くめしてみこと



ばありほどなく侍従長参りて何ごともと、のひたりと奏すや  
がて劔璽をさきだて、汽車に召させ給ふみづからもつらなれ  
る車にのる笛の音きこゆるまもなく烟をあとしして御車はと  
くす、みぬ道のほど大かたは田畑にてさのみかはれることも  
なしされどいづこも稻のみのりよきを見るは民の爲うれしき  
ことぞがし埼玉のあがたはさいつころの洪水に利根川の水あ  
ふれきとて民のいたづきておほしたてし畑つものなども皆あ  
れはてたり河の如き處もありてみゆきをろがむ人々もあるは  
水に入りあるは舟を浮べなどすいかにして一日々々を送りつ  
らむと思ふに胸いたうなりもてゆくそこを過ぎぬれば稻葉の  
浪田のみにみちあふれたるけしきに心もかはりぬ處々のさま

めづらしなどいひつゝくる間にはやう水戸につかせたまふ停  
車場より御馬車にて行在所にいらせたまふこは舊城内にある  
師範學校をそれと定めたまへるなりとぞとばかりありて例の  
みたいめのことありはてさせたまひし後もいさゝか疲れさせ  
たまふみけしきなくてあすの演習の方略書などとうでさせて  
御覽ずかく御心にかけさせ給ふを見奉るもかしこしこの夜も  
常のごとく十一時におほとのごもりぬ二十七日けふもてけよ  
し八時よりいでたゝせたまふ汽車にて実戸といふ處までわた  
らせ給ひそれより金華山と名付けたる御馬にめさせたまふ有  
栖川宮北白川宮をはじめおとゝその外あまたの人々近衛の將  
校なども馬にて従ひ奉りぬみづからは馬車にてゆく岩間村に



いたらせ給ふころ遠近に烟たちのぼりつゝの音こゝかしこに  
聞えて赤白の旗風にうちなびき馬のいなゝくこゑもところど  
ころにきこえたりたゝかひたけなはならむとおもふころはつ  
つの音もたえまなきに御心いさませたまひて折々はことかた  
に御馬すゝめさせつゝねもころに御覽じたまふ折しも秋の末  
つかたなれど日かげは猶あつくおぼゆるに更にいとほせ給ふ  
みけしきもなきをこの演習にいでたる兵どもはさらなり文武  
のつかさ人なべてかしこみ奉るなるべしほどなく終りぬと奏  
するより御野立にてしばしいこほせ給ひさて汽車にめして行  
在所へかへらせたまふ二十八日も昨日の時刻よりいでたまひ  
てこたびは成井村にて御覽あり筑波山近く見えてけしきいと

よし大かたはきのふのごとしされど今日は敵のちかづきたり  
と見えて大砲小銃のおとはげしく廣き原にもひゞきわたりぬ  
上には例の御馬にて道も定めさせたまはず森の中松の林など  
にわけいりて見めぐらせたまふに木の枝の御あぶみにかゝる  
もいとかしこしみづからも車よりいでゝ小銃の連發又は大砲  
のうちかたなども見ずやと附添へる士官のいふにさらばとて  
おりたつ黒けぶりたちのぼる中に火氣見えてはげしき音のき  
こえたるいといさまし事あらむ日は親妻子をもかへりみず君  
のため命をすてゝたゝかひなむとおもふにいとたのもしくは  
あれど又いたはしくて胸もふたがるこゝちぞする今日の演習  
も果てぬれば御野立にて晝のおものきこしめすそれより御馬



上にて觀兵式分列式御覽ずみづからは例の馬車にて見る終りて審判あり小松宮はじめ將校うちつどひて御まへにす、む兩日のいたづきをねぎらひ給ふみことばありかたじけなみ奉りて敬禮するさま見るもめでたし小松宮には兩日の演習のよしあしを高らかにことわりたまひぬしよし御休ありて汽車にて行在所にかへらせたまふ御道よりおぼした、せて縣廳へ臨幸ならせたまふけふはあやにくに御風のこ、ちにてれいならず見えさせたまふをもてかくしてかくつとめさせたまふいとかしこしみづからはおほせごとによりて常磐公園なる好文亭といふところにゆくいたりつけば徳川昭武その外人々出迎へたり梅あまた植ゑたる林ありこは事ある時の爲に實をたくはへ

むとてなりとぞさまの木の立ありて庭のつくりざまいとおもしろし老松のかげに石の碁盤將碁盤すゑおきたる珍らかにてしばしたちよりて見る高きところなれば家のうちより仙波湖見わたさる十五夜の月のさしのぼるけしきいとよし色づく小田も見おろされたりこは中納言齊昭の世をのがれて後心やすくすまひして民のなりはひを見むために造りしといふさもあるべくおもはる家の内廣らかにて杉戸には詩の韻字のこらざか、せて詩人を招く時の爲とし又五十音てにをはをか、せて歌人のためとしたる心しらひのあつさを思ふにいとゆかしまた板敷ありこ、は心ある人々にをり、みきなどあたへし處なりとぞたちかへる道のほど弘道館の碑を見る八角の堂の



うちに寒水石の大きやかなる立てり世にしられたる記を自筆  
のまゝほりいれたるなりけり一句々々讀みもてゆくにその人  
の御國を思ふ心ざししたはれて涙ぐまれぬ戸びらにはこまや  
かなるほり物ありかもるとおぼしきところには易の八卦をほ  
りつけたり昔は此處に學舎あまたありきといふげにめづらし  
きところをみしかな是も上のおほせごとなくばといとうれし  
くて時の過ぐるも覺えず人々夜更け侍りぬべしといふにおど  
ろかさされていそぎかへる月夜なれどかゝり火たき提灯などあ  
またてらして晝のごとし御まへに參る上には六時ばかりに歸  
りましたゝきときゝておくれ侍りぬなど奏するにうちわらは  
せたまふ好文亭のことなどつばらかにとおもへどとみにいひ

つくすべうもあらねばかたはしのみ奏すしるさまほしきこと  
ども多かれど筆もすゝまずことにあす東京へかへりまさむと  
て御調度どもとり納むるにものさわがしければかきさしてや  
みぬ

世の中秋になりぬれど日盛のあつさはいまだ堪へがたうて何  
事もおこたりがちなるを日かげやうゝかたぶきしかば南お  
もての端近う出づるにさとうちふきし松風に垣根の萩の露ほ  
ろほろとちりてすゝしの袖のうらがへるも涼し軒のつまより  
くれわたりてなみたてる常磐木の間やうゝあかくなりゆけ  
ばいまやゝとまちわたるに月影すこしほのめきそめぬとば



かり見出だすうちにさしのぼりたる光さやかにて蟲の音もき  
こえそむるにおのづから心も秋にうつりぬ

あつき日もやうく暮れなむとするころふと思ひたちてかね  
て大后宮のわたらせたまふをりのおまし處とさだめおかれた  
る殿のわたどのよりおりて芝生の道をゆくに板戸のあきたる  
ところありいで、みればこゝぞ御園の畑にてこき紫の色した  
る茄子青やかなる瓜などさまじくになりいで、宮のうちとは  
おもはれぬに藁屋のひとつだに見えぬぞやうかはりてをかし  
きや女房の瓜をとるとてわれもくくと手鉄もちてたちよるを  
見つゝ、いやしからぬ賤のめかなとうちわらふほどにはやう道

もをぐらうなりぬればおまへに奉らむとていそぎかへりぬ

日ごろふりつゝきたる雨にとぼり深うこもりたりしを夜のあ  
けゆくころよりやうく小雨になりぬれどよべよりの風はま  
だふきやまが十時ばかり日影ほのめきそめぬれど猶をりく  
は雲のうちにかくれしをまひるばかりにぞ名残なく晴渡りて  
緑の空にはなりぬる例の二重やぐらへゆきて見よとおほせご  
とありければ夕つかたより女房たちゐて行くかねてゆきなれ  
たる道よりと思ひしを雨水のいたくたまりたれば築山のうし  
ろの方よりのぼらむとするにこゝも御池の水あふれいでたる  
に石ふみこえつゝ、からうしてゆきつきぬめなれし處なれど常



よりも多く額をかけさせたまひたればねもころに見めぐりつ  
つ今日はことに風も涼しければかへりかねてたちもとほるほ  
どはや日も暮れそめて大路のともし火多く見えわたりぬげに  
大御代のにぎはひは夜もさやかに見ゆるよとおもふにいと  
れしくて

家ごとのともしび見つ、かへるきの道はくらさもしられざりけり  
などくちすさびつ、あまりにおくれむもいか、あらむとてい  
そぎ歸りぬればはやおものまゐるころになむありける

夕日のかげもなごりなく暮れはてたる空に星の光はかざし  
ら  
ザ見えわたれど芝生の露は見ゆべうもあらねば月おそしとの

たまはするに例の人々とみにみはしをくだりぬほどもなくあ  
またの燈籠に火ともしわたしたる御苑のけしき見そなはして  
興ぜさせたまへるほどやうく梢たかくさしのぼりたる月の  
光にあたら心しらひの灯もきえたるごとく見る人もなくなり  
てたゞ月夜よしとのみいひあひたりうへにもはしちかうおま  
しうつさせ給ひて何くれとみものがたりせさせたまふ御つい  
でに小萩がもとの露やいかにおほせごとあるにをりくは  
きらめきても見え侍りなど御いらへまをしつるほど花やかな  
るもあはれなるもさまざまに蟲のなきいでたるふせごにこめ  
てきくよりもいみじうおもしろしとぞきこしめすみづからは  
おばしまのもとにゐざりいで、聞きわく人ならましかばいづ



れをかえらばましかくてむなしくきかむことよ蟲のおもはむ  
こともうたてしやなどいふほど菅筵うちしめりて月のかげも  
ふけわたるに蟲のねのよひよりもしげくきこえければ

みめぐみの露おきあまる秋の夜を何にわびてかなきあかすらむ  
とひとりごちつ、夜風もさむくおぼえければやうくおくふ  
かくすべり入りぬ

野分のあした

夜なかばかりにかありけむ風あわた、しう吹きたちければい  
もねられぬま、に前栽の花うしろめたしと思ひつゝくるほど  
からすの聲のきこゆるにやうくあけぬなりとつまどすこし  
おしあけて見れば風もおほかたやみて雲は猶たちまよふ空に

月の残れるもさすがにをかしくとばかり見いだしたるにま  
だ時早し御格子もいまだまるらずと女房どものいふにさはと  
てふた、び閨には入りしをおもひの外によくねいりにけむ日  
もたかうなりさぶらひぬとつぐる聲にうちおどろきておきい  
でつ、垣根がもとを見れば萩も薄もみだれあひておのづから  
なる野べのけしきに似たるなかくにおもしろければ朝清め  
もわざとおこたらせてみけるに松の小枝の落散りたるなど野  
分のなごりいとしるし宮のうちだにかゝるを貧しき民のすま  
ひやいかならむと思ひやられて袖もうちしめるこゝちするほ  
ど若き人々のゑみたる栗の枝ながら籠に入れたるをもて來ぬ  
時のまに多くも拾ひてけりと賞しつゝ、かつはをさな心にかへ



りにけるよといふにこはなぞたゞ御覽せさせむばかりにこそ  
とことわるをうちつどふ人々あまりにことさらめきたりと笑  
ふほど時計を見ればはやう十時ばかりにぞなりぬる益なきこ  
とに興じけりとみづから心をいさめつゝ例のわたどのづたひ  
にまうのぼりぬ

秋情

萩の上風はぎの下露とかやげにたゞならぬは秋のゆふべにぞ  
ありける年ごろかり宮にところせくまししゝしほどはまこと  
にさることぞとおぼえてうき秋かこちたりしをりゝもあり  
しをこの大宮にうつろひましゝよりはよろづとゝのひておの  
づから心もやすらかなればいとまある時は御そのにおりたち

つゝ萩をりかざし椎の實拾ひなどさまゝに興じて日のみじ  
かきをなげくばかりにぞなりぬるされど白露のおきあまりて  
風にうちみだれ蟲のこゑのこゝかしこにきこゆるゆふつかた  
などは物をおもはぬ身にもあはれおぼゆるは秋のならひにこ  
そあめれ

菊始開

秋の半もやうゝすぎゆくまゝに萩もすゝきもうらがれ渡り  
て何となうさうゝしくなりもてゆくを園守の心づくしにこ  
こかしこよりえりあつめてうゑわたしたる菊のさまいとをか  
しをすあげさせて見そなはずに白き赤きけぢめは見ゆれどさ  
きいでむほどはまだいつともわきがたかりけりされど多かる



中にはつぼみのふくらかなるもまじれ、ばおもひの外にはやう匂ひそめむこともやおほせらるゝに若き女房たちの頭かたぶけつ、明日といひまたの日といひあらそふもをかし日もはやくれちかうなりてみはしのもと松風ふきいでぬれば秋も身にしみてとのたまはするほど心き、たる女房のすだれをさら〜とおろしつればやがておくふかくいらせたまふものあやめもわかぬばかりくらうなりぬればいそぎおほとなぶらもてまゐりぬ夜の長き頃なればうへにはふみどもとりいさせたまひてむかし今のことゝもおぼしあはせられてみころしづかにましますほどやう〜十一時ばかりにもなりぬるに御文机のうへのもものどもとりあつめさせてやがて大のご

もりにたれば女房ども、皆すべりいでぬふけゆくかねもしらぬまに夜はほの〜とあけわたりて御格子まるればおどろきて起きいでぬ朝ぎよめのみやつこもまかでぬとて例の女房さうじ少しあけつれば風なつかしう打薫るによく見れば二つ三つばかりさきいでたるなりけり昨日いひしにたがはずとわれはがほにいひほこるもをかし上きこしめしつけてまことにやとのたまはするにはやうみそなはせとそ、のかし奉れば朝風猶寒けれどしばしはし近ういでさせたまひぬいろわきてさきたる菊のみゆるにぞことの外に興じたまひて天長節には必盛ならむとおほせらるゝそのみことばにつけて千代田の宮の秋の盛とみづからいひいでつればうちゑませ給ふもいとかしこ



し

うちなびくみはたのきくも西の海のはてまでかをる君が御代かな  
など思ひつゞけらるゝもげに事なき秋のすさびなりけり

観菊宴

かねてより定めおかれし菊の宴せさせ給ふべき今日となりし  
をあやにくによべよりの雨猶やまねばいかにとのみ思ひわた  
ることに赤坂の宮までみゆきましゝの御うたげなれば空  
のみうちまもられてしづごゝろなしされどとりつくろひなど  
するに十二時ごろになれば風すこしふきいでやうゝ雲もな  
びきそめて日かげさやかにさしわたればいよゝおぼしたゝせ  
たまふ宮のうちおのづからにぎはしうなりもてゆくほどみと

もの人々もうちつどひぬ御車もひきいれたりとそうすればや  
がて御門をいでたゝせてかの宮につきたまふさて庭づたひに  
御車きしらせてしばし聚錦亭にていこはせたまひし後出御ま  
しまして菊の花を御覧じつゝあゆませ給ふにかねて召された  
る内外の人々御道のせばきまで右に左にたちならびてあふぎ  
奉る去年はこのところにてわが國のおとゝたち外國の公使な  
どにおほせごとありけるを今日は俄に晴れぬれば又ふりいで  
むこともやと人々のうへをおぼしやりてたゝちに立食所へわ  
たらせ給ふしばらくして参れるかぎり御前近く召出でつゝね  
もころなる御詞をたまひて御いしにつかせたまふみづからも  
おほむかたはらにつきぬやがておものみきなど奉る人々も酒



饌たまはりて盃をかさぬるま、にさきにみめぐりし菊の品さ  
だめしつゝ、めでかはしわらひ興ずる聲のかりやのうちにとよ  
み渡るもいとにぎは、しかゝるをり、にぞ御うつくしみの  
波八洲の外まで及べることもしらるゝに何となう打笑まれて  
見奉る上にもみけしきいとうるはしう何くれとさわやかにの  
たまはせたまふ例の樂隊してにぎはしう奏せさするに人々の  
心ののどやかに見えたるも波風たゝぬ御代の秋なればとおぼ  
えて千年もかくてあらまほしきこゝちぞせらるゝや

時雨ふる日

けふは吹上の御苑にものせむとおもひたちたりしを出立たむ  
とする頃より時雨の雲のたちかさなりて今にもふりいでぬべ  
き空あひにぞなりぬるおほせ言にもあらぬをもし道にいた  
くそばたれむにはともにさぶらふ人々のなやみもいかゝとお  
もひたゆたはれてさてやみぬしばらくして風はげしうふきい  
で雨さへそひて窓のうちまでうちしぶくに戸をさゝせむと思  
へどあまりにくらかるべければさうじのみさゝせたるに時の  
まにぬれて紙どころ、やぶるれば人々つくろひてむといへ  
どぬれたる紅葉のことにさやかなるが見ゆればわざとさてお  
かせたるにまづしき人のすまひめきたりとうちわらふ人もあ  
れどそれもまためづらかにをかしくかつはさるきはのおもひ  
やりも出来ぬべしといへばこの寒き日に御風ごゝちもやとこ  
そおもひ奉りしにかへりて雨ごもりの御つれ、もなぐさま



せたまはむをこゝろなくもきこえさせつるかなといひつゝ、笑ふ今朝まで黄ばみたりし枝の大かた赤くなりたるにあやにくにもといひしも忘れて心ある雨よといひあへるもをかし暮方ちかうなりてはまことに寒うなりぬるに戸をさゝせつれば人もやう／＼うち散りしぞさう／＼しきや

年のくれ

月日のうつりゆくまゝにはやう十二月二十日あまりにぞなりぬる冬木のこずゑ風わたりて寒さもいとゝまさりたるにみその、梅のまばらにさきいでたる年のはじめのこゝちすなどいふもをかしことしは春秋にみゆきありて宮のうちにまします日のすくなかりければにやいつよりもとく年の暮れぬるこゝ

ちすけふは例の煤拂ふ日とて御調度ども皆わたどのつゝきなる東のとのにうつしてかりのおましよそほひたるに上には御みづから劍璽を守らせたまひてうつろひましぬされど御政事暇なき頃なればかゝる日もおとゝたちの御たいめことしげくて大かたは御小座敷にましませり四時頃になりて今朝よりいりこみし人々まかでぬと奏するにやがてもとの宮にぞかへりたまふところ／＼のをすもあたらしうかけかへたる清らに見えていとこゝちよし上には朝拜のことなど何くれとおきてさせたまふさぶらふ女房たちつぎ／＼にもものたまはるめりさるなかにも歌御會始のこと心にかゝりて語りあへり年あけなはにぎは、しうて宮づかへもことしげくやあらむはやう歌もよ



みおかばやおもへどまだ一首だにといふもありあるはえらばるべきは誰がにかあらむといふもありていとをかしことなくてことしも末になりたるはめでたけれど何となう心もいそがるればまた日の長くなりなむ時おもひいづることあらばかきもくはへてむ

華族女學校にものしける時

年のうちに今ひとたびとこはる、ま、にかねて心にかけたることなれば十二月の十九日といふ日九時ごろより華族女學校にものしぬいたりつけば職員どもをはじめてあまたの生徒うやうやしくいでむかへたる處がらことにうれし階をのぼりてまうけの座につきぬるに冬もしらぬばかりあた、かにしな

したる心しらひのほどあさくもおぼえず例の人々のたいめなどもをはりぬればやがて室毎にいりて授業を見るにをさなき子の何心もなくうちゑみつ、心やすげに教をうくるいとらうたげなりか、るほどより學びてこそはと未たのもし又ねびとのひたるかたはあからめもせずひたすらにまなびの道に心をいれためりわざのす、みたらむ後はかならず世のかゝみともなるべきが多からむとおぼゆるうへにたちゑふるまひなどのつゆ男さびたるさまなくなつかしげに見ゆるこそうれしけれ猶のこるかたなく見めぐりてもとの處にてしばしやすらふに十二時半ばかりになりぬさてかへらむとするに園にて遊びるたりし子どもの聲のしづまりぬればいかゞしつらむとおも



ふにはやわれを送らむとて門のかたにゆきぬるなりといへば  
心もいそがれて車にうちのりぬ

餘寒

春たちかへる空のけしき何となうのどかなりと思ひたりしに  
けさは雪げの雲のたちまよひて風もいといたう吹きあれたる  
今はた冬にかへるかとおもふばかりにぞありけるされば宮の  
内だに寒くてすびつなどうでさするにをすのとちかくにほ  
ふ梅も雪かと思ゆるぞをかしきや若き女房たちのさすがに枝  
はえをらでこぼれたるつぼみを拾ひ集めて見するに水がめに  
浮べてだに奉らましかばいかに興ぜさせたまひなむといへば  
たゝ手すさび事に侍りしをかく匂ひいづるこそうれしけれと

てうちゑみつゝまうのぼりぬ風のおこりもぞするといへどわ  
れさきにと拾ひ争ふにかへりて汗もいづべきこゝちしつとい  
ふをきゝて年のわかければこそおほせごとにもあらぬをとう  
ちわらふ人の多ければはぢらひてまかでしもをかし日のなが  
き頃なればかゝる事にもうち興じぬかし

摘草

このねぬるあしたのほどは深くかすみわたりて雨にもなりぬ  
べう見えたりしを空やうゝ晴れわたりてさしいでたる日影  
もいとのかかりければふとおもひたちて御苑にもものしぬ廣  
芝のあたりに至れば若草のあまたおひたちて花の色々見ゆる  
に目とゝまりてしばしたちやすらふほど若き人々のつみはや



しつ、これもうるはしかれもかぐはしなどいふにうちまじり  
て興じつ、時の過ぐるもおぼえずあはれ宮たちにつませまる  
らせて見奉らばやいかにらうたくおはしまさむをといひしに  
こは上に御覽せさせむの御心なればあながちに御わたくしの  
御すさびのみにはおはしまさじをといらへするもをかし夕つ  
かたは風もふきいでぬべしと人々のいふにさらばとてかへる  
がへるもまた摘みそへつ上にも遠からず御馬めしいで、わた  
らせたまふべきをと思ひてかへりみるに咲きたる花の多けれ  
ばにやいづこもさびしくなれりとは見えぬぞうれしきおのづ  
から心ものどかにて日のかたぶくほどにぞかへりまゐりぬる

春日田家

去年のこのごろは西の都にみゆきありけるをはやう一とせも  
すぎぬるかなとさらにその時のことゝも思ひいづるが中に東  
山のけしきは言ふもさらなり麓の畑に麥の青みて鈴菜の花の  
うちかをりたるいとおもしろかりきなどかたりあひつ、里人  
のあれたるわらやよりいで、れんげ草の咲きみちたる田面を  
かへすをそのいたづきもおもはでたゝ花を惜しと思ひしこそ  
われながらをかしうもはづかしうもありしかとひとりごちし  
にかりそめのことまで忘れたまはずといらへするに民のわざ  
ばかりいとまなきはなしさるをなほざりに思ひしことよさぶ  
らふ御達なればこそかゝるよしなしごとにもかたるなれといひ  
つ、打笑ひぬすぎこしかたを思へば何ごともみな一夜の夢な



りけりな

待花

さかり久しと思ひたのみし軒端の梅ものこりなうちりはて、  
御苑の春もさうくしうなりにたるに黄鳥の心ありげにたえ  
ずさへづる聲のなつかしければはしちかういで、見るに柳の  
眉かとおもふばかり櫻の枝のふしだちたれどいまだ蕾のそれ  
とだにわかぬぞかひなきやかくて一日々々とまつほどにやう  
やう花の色のはつかに見えければ上につげ奉り人々にもいひ  
しらせつされど時ならぬ嵐の寒ければにやほ、ゑむともなく  
て日敷かさなりぬ御宴せさせ給ふべきはいつのころにかあら  
む去年の春はこの大宮におはしまさゞりしかばさるべきこと

どもむなしうなりにしをことしはにぎは、しうとこそ上にも  
おぼすらめなどとりくいにいひつゝけて今日か明日かと思ふ  
ほどにやうく梢まばらに咲きいでぬ御宴の日はいつにか定  
めさせ給ふらむといふをきこしめしてまだ盛にはほどもある  
らむものを何とてかく春に似ぬ心ぞとうちわらはせ給ふに御  
いらへもきこえさせずあまりにあわてにけりと我ながらおも  
ふもいとをかしうこそ

月あかき夜

ふるきこよみの九月十三夜なりとて空うちながめたるに村雲  
のたちかさなりてさやかにも見えざればむなしう内に入りし  
もはやうをとつ日とはなりぬこよひ十五夜の月こそよからめ



とて女房三たり四たりばかりなむ紅葉山に行きけるみづからは風のこゝちにて大前にもまうのぼらずしはぶきがちにうちふしたるが今はおこたりがたなれば枕をそばだて、見るにたてこめたるさうじに影のうつりたるさすがにをかしうこそありきれいにし年のけふは水戸の好文亭より仙波湖の月も見しを今年はをりあしうてうちむかふことだにかたければおぼしまちかう立出で、かたらへる人をよび入れて御苑のけしきやいかにと尋ぬるにこまやかなるいらへぞなきうちつけにいぶかしく思ひしかどよく思へばそはわが爲なりけりたゞによしときかばおもはずたちいでもやせむとおもひてなりけりなかなかに月見むよりもうれしき人のなさけにこそ

## 新年

あらたまのとしたちかへりぬれどまだ春といふべきにもあらねばこの暁の四方拜の御まうけどころ風の寒さいかにぞとよべより思ひつゞけゝるにすびつなどもおしやらむばかりあたかにて朝日うら／＼とさしいで、御苑わたりも何となう打霞みたるにおのづから心ものどやぎぬ上にも晴のおものきこしめさむとみぞひきつくろはせていできます女房たち御いはひの式の具など今のうちにと取集めて御ましどころにすゑ奉りなどするにほどなく入御まし／＼て例のごとく御祝ごと行はせ給ふしばしいこはせたまふほど朝拜の人々もそろひたりと奏するにこたびは正殿にいでた、せ給ふに従ひてまゐりぬあ



またの人々のことほぎうけさせ給ふみけしきいとうるはしう  
見奉るさて夕つかたの御盃ごともをはりぬれば朝まだきより  
何くれとつかうまつりし人々も少しいとまあるにゆるびやし  
けむ火桶のもとにうちつどひて今日のめでたさなどかたりあ  
ひつゝをりゝは打笑ふこゑのきこゆるかとおもへばしはぶ  
きもなくしづまりぬるにねぶりをやもよほしつらむとおもふ  
ほど上のめさるゝに驚きてたれをかと見めぐらすもありわれ  
にやあらむといひてすみやかにまるるもありそをきこしめし  
てうちわらはせ給ふものどかなる代の年の始の御すさびにこ  
そ

花のさかりに

さだめなき空のけしきにやさそはれけむこゝち常ならずさり  
とて打臥すほどにもあらねば強ひてまうのぼりぬ上は出御ま  
しましたりとて女房どものおぼしまちかくたちいで、何事を  
かかたらひつゝ、打笑ふを見てこれぞまことの花見なるとふと  
ひとりごちしにしばしいでさせたまへ風もあたゝかなればさ  
はらせ給ふこともおはしまさじなどそゝのかすがうれしけれ  
ば同じくば花のかげまでと思ふはいかにこれもこの醫師ども  
にとひてこそといへば皆うちわらひて嘉根子こそ苗字を藪と  
よばればべればとく御いらへもつかうまつるべけれといふも  
をかしまづ御階をおりむとするに例の御達みともつかうまつ  
らむとてわれもゝときたるかと思へばかならず同じ道にと



もなくておもひくくにおがこのむ花のかげにゆきしも常にか  
はりて興ありけり

扇

おぼろに見ゆるまでたちこめたりし御苑の霧もやうくはれ  
渡りて日影のさしのぼるころより風さへふきやみてひるのあ  
つさのたへがたければおぼしま近く立出でつゝ空のみうちな  
がめて一しきりふらましかばと思ふにあやにく雨雲の見えぬ  
ぞかひなき草木もしらぬ風をこめたる扇といふものもいつの  
御代よりの御さだめにかあらむ大前にては憚るべきことにな  
りにたりそも夕つかた湯あみにとてまかでしよりは心のまゝ  
にもものすべけれどもたぬになれてとらむとしも思はぬをこの

あつき日にとて御達のすゝめつゝ御手たゆくばつかうまつら  
むとて色々の繪かきたるをとりいづるに風を専とするものな  
がらさすがにこの秋草の花はいかに岩根にかゝる白波はとい  
はれては涼しき繪のかたをとるぞをかしき長き日もくれ近う  
なりてやり水のあたりをゆきめぐるに森の下風さとふき渡り  
て汗もひぬべくおぼゆるにあつしとわびたりしも夢のやうに  
こそなりにしか

秋のはじめ

秋たちしよりやうく十日ばかりなるに御苑のさくらもみぢ  
してあしたの風にちりみだれたる見すてがたうてはしちかう  
たちいでぬ前裁のすゝき一もと穂にいで、打靡きたるさすが



にかしうこそありけれされど日盛は猶あつくて蟬の聲の梢  
あまたにきこゆるなどたゞ夏とのみおほゆるものから夕つか  
たは何となう吹來る風も身にしみ庭のは、その下草露ちりて  
ち、となきそめし蟲のこゑやめづらしかりけむ何事をか語り  
あひたりし女房の聲もとみにやみぬこれなむ日ごとく御題た  
まはる人々なればまたの日はかならずいまなく蟲の聲よりも  
なつかしうよみて奉るならむといひしかばおもひもよらぬお  
ほせごとかなとことさらにいらへするもなか／＼に興ありと  
かくいふほど夜もふけわたりけむ松の嵐のさむうふき渡るに  
みこ、ちなそこなひたまひそといひければ人々と共に奥深く  
すべりいりぬ

## 禁庭の野分

朝露のひるまはさしもなかりしそらの俄にかきくもり夕づ、  
の光もみえずとかくするほどに雨いたく降りいで、ほとり近  
くかたりあふ人の聲だにき、わかぬまでになりぬ聞に入る頃  
はなほ雨のおとのみきこえしを夜ふかくなるまゝ、に雷さへ鳴  
りはた、きて夢現とも思ひ定むるひまなく稻妻のきらめきわ  
たるいとけうとしあかつきがたには雨はやみぬれど風はげ  
しうふきいで、宮のうちもゆるぐばかりなるにいとゞ目もあ  
はず上には民のためとてかしこくも遠き境にいでましたるほ  
どなればいかなる行宮にまし／＼てこの風の音に御心をなや  
ましたまふらむ皇太后の宮にはいかにおはしますにか幼き宮



たちもおどろきやしたまふらむと思ひつゝくるほどに夜も明  
 けぬれどいまだ風静まらでいづこもおろしこめたるいとも  
 むづかし軒近き栗の枝のむすべる實ながら吹折らるゝおとい  
 と烈しく御階の下の芭蕉も筒井のかたはらなる柳も皆をれふ  
 しぬ今を盛と見えし眞萩も名残なくちりみだれたるいとさび  
 しく見ゆ宮のうちだにかくあれぬるをましてあやしげなるし  
 づが家居などは倒れぬるも多からむなど思ひやればすゝろに  
 悲しおしなべてみのりよしと聞きつる千町田の稻もふきそこ  
 なはれつらむやなど心にかゝりて

國のため科戸の神もこゝろしていな葉のうへはよきて吹かなむ

なほとやかくとむねをいたむるほどにいつとなく静まりて日

影まばゆく雲間にさしいでぬるにおのづから人のこゝろもお  
 ちるにけり

金剛石

金剛石も	みが、ずば
珠のひかりは	そはざらむ
人もまなびて	のちにこそ
まことの徳は	あらはるれ
時計のはりの	たえまなく
めぐるがごとく	時のまの
日かげをしみて	はげみなば
いかなるわざか	ならざらむ



水は器

水はうつはに	したかひて
そのさまづくに	なりぬなり
人はまじはる	友により
よきにあしきに	うつるなり
おのれにまさる	よき友を
えらびもとめて	もろともに
こゝろの駒に	むちうちて
まなびの道に	すゝめかし

右の唱歌二篇は明治二十年三月華族女學校へ賜へるなり

附載

みが、ずば玉も鏡も何かせむまなびの道もかくこそありけれ  
 右明治九年二月東京女子師範學校に下し賜へる

きよらなるはちすの絲の一すぢにいのりし老が心をぞおもふ  
 右明治十一年大藏卿大隈重信の老母が年月とりあつめし蓮の絲も  
 ておりいでたる佛像をたてまつりしを見そなはして下し賜へる

鶴遐年友

雲の上のしるべたのみし老松の千代にともなへ天のたづむら



右明治十二年岩倉洗子の八十の賀に下したまへる

霜後殘菊

霜をへてなほこそかをれ大君のかざしとなりし白菊の花

右明治十七年贈太政大臣岩倉具視の追悼に下し賜へる

寄竹祝

よろこびのふしをかさねて吳竹のちよも榮えむ未ぞたのしき

右明治十八年晃親王の七十の御賀に下したまへる

ひらけゆくまなびの窓の花ざくら世に匂ふべき春をこそまで

右明治二十二年五月ある女學校へ下したまへる

寄筆祝

も、とせを千年の坂のはじめにて筆の林もわけはまどはじ

右明治二十二年四月從二位伊達宗紀の百歳の賀に下したまへる

寄松祝

さかえゆく老木のまつは若松の千年の末も見るべかりけり

右明治二十八年晃親王の八十の御賀にくだしたまへる

鶯有慶音

このやどのさくらの絲をくりかへし末長かれと鶯のなく

右明治二十八年二月從一位勳一等近衛忠熙の八十八の賀に下し賜

へる

菅原道眞

君をおもふまことの道の一筋はかねてもしるし放つ矢先に



右明治三十五年二月菅公會へ下し賜へる

國のためすてしこの身を惜むにもまづ思はる、親心か  
ちよふべきうまごを杖に吳竹のすくよかにして御代につかへよ

右明治三十七年九月海軍少佐高崎元彦が戦死せしにつけて父樞密

顧問官男爵高崎正風がよめる歌を見そなはしてくだしたまへる

あしたづのはやまの里にうちむかふ富士より高き齡かさねよ

右明治三十八年皇后宮太夫子爵香川敬三の別業にてよませたまへ  
る

あえものともてはやすなりすくよかによはひかさねし人の盃

右明治四十二年六月伯爵土方久元樞密院副議長伯爵東久世通禧樞

密顧問官侯爵佐佐木高行同子爵黒田清綱の高齡を祝賀する催あり

ときこしめして下し賜へる

さやかなる聲こそこのこれことのはの道しるませし山ほと、ぎす

右明治四十三年五月正二位勳二等三條西季知の三十年祭に下した

まへる

さらにまたへぬべき千代ぞこもるらむいや榮えゆく松の二木に

右明治四十三年樞密顧問官侯爵松方正義の金婚式に下したまへる



松間鶴

あしたづの雛をはぐ、む聲すなり雲ゐる峰の松の梢に  
右明治四十四年一月侯爵前田利爲に下し賜へる

大正八年四月二十四日奉 旨

大正十年十二月二十日編成奏上

臨時編纂部

- 長 正三位勳二等子爵臣入江爲守
- 幹事 正五位勳四等臣三室戶敬光
- 顧問 正二位大勳位功一級公爵臣山縣有朋
- 顧問 正四位勳三等醫學博士臣井上通泰
- 委員 從三位勳四等伯爵臣三條西實義
- 委員 從三位勳三等子爵臣東坊城徳長
- 委員 正五位勳四等臣坂正臣
- 委員 正六位勳六等臣池邊義象
- 委員 正六位勳六等臣千葉胤明
- 委員 正六位勳六等文學博士臣佐佐木信綱



書記 正七位勳六等臣加藤義清  
 書記 正七位勳七等臣遠山英一  
 書記 臣根本新之助  
 臣外山且正  
 囑託 從四位男爵臣金子有道  
 臣小野田貢

故幹事 從三位勳二等近藤久敬  
 故顧問 從一位大勳位公爵德大寺實則  
 故委員 從六位勳五等大口鯛二

索引

此の索引は御歌の初句を五十音順に非列したるものなり。同じ何二つ以上ある場合には次の句に及びべし。

あえもの	二五三	あきふかみ	一八三	あしがちる	五七	あづまやの	九五
あかつきの		あきをへて	四四	あしたづの		あてものも	一一三
かねにねぞめて	一一六	あげまきの	二七	翅ゆたかに	四四	あふごとの	一五四
くもふき拂ふ	二九	あさあらし	一四三	はやまの里に	二五二	あふみぢの	一七九
あきあさき	一〇一	あさがほの	一九九	籬をはぐくむ	二五四	あまがやの	一七四
あきくさの	一九九	あさぎたに	一〇七	あしひきの		あまつかみ	一八六
あきごとに	五六	あさごとの		山下庵の	二〇四	あまづたふ	九九
あきさむき	一八九	あさごとの		山べはしらず	七〇	あまつひの	
あきたけて		数こそまされ	七八	あすさかむ	六三	てらさむかざり	三四
かれむとすなる	一一八	花さきながら	七七	あた、けき	一七一	てらすが如く	二〇二
しぐれもよほす	一三〇	むかふかゝみのいつは	一八五	あだなみは	九二	光をうけて位山	一一六
實になりはてし	一〇六	むかふ鏡のくもりなく	一三三	あたらしき		光をうけて年々に	一九七
あきのひの	七八	あさしとて	四	色こそ見ゆれ	五六	あまのがは	七六
あきのよの	五	あさづくひ	二〇二	年の初日に	一〇五	あめかぜに	一五九
あきのよの		あさつゆの	三九	わらやもみえつ	一〇五	あめそぐ	
風ひや、かに	一八九	あさとやる	一四九	あたらしく	七九	かきねの椿	八
なが浦とほく	六九	あさな	一五八	あぢかはの	三三	田中の里の	二七
長くならばと	一五一	あさまだき	二八	あづさゆみ		軒の玉水	一一
あきはぎの	一五	あさゆふの	一三	はるより外の	一五七	あめにつけ	八五
あきびとの	五〇	あしかは	一七三	やしまの外も	七七	あめのした	三〇



あめはれし	一三三	いかにとも	二二七	いさりぶね	九一	いまいくか	一四八
あめはれて	七〇	いかばかり	二二三	いしのかみ	一五三	いまたえむ	一六七
あめふれば	一〇七	うれしかるらむ	二四二	いたゞきの	二二九	いまむかし	一七〇
あやにくに	二一八	苦しがるらむ	二四二	いたづきも	五一	いらかより	一六四
あやにしき	二〇	つもりにけむと	五七	いたづきも	六	いりうみに	一〇二
あやまたむ	一五四	いかほかぜ	一四一	いつくしむ	二六	いりひさす	五〇
あらがねの	一八八	いかりおろす	二七	いつくしむ	一九五	いろくづも	二〇一
あらそひて	一〇二	いかりづな	一四五	いづこまで	三八	いろづける	四三
あらたま	二〇四	いくさびと	二二	いづこより	四九	いろもかも	三六
今年を千代の	一八一	いたる處に	一六六	いつとなく	一四三	うがしまも	一六六
としの初日の	一八二	みいつをのせて	八三	いづれをか	一六九	うきくもの	二七
としのほぎごと	一八八	いくさぶね	一一〇	いとほしく	一〇九	うぐひすの	二二
ありあけの	六六	いかりおろして	一六二	いなぐきの	三四	青葉にまよふ	三三
月しづかなる	二二九	かへるをまちて	一一〇	いにしへの	一四	こゑあはずとも	三五
月をのこして	一四四	いけのおもに	一五三	いとをのこせる	一四	聲ばかりして	七四
あれはて、	七	影こそうつれ	一五六	いはきたく	一一二	しめたる枝は	五一
面がはりせる	一八四	ちりし櫻は	一五八	いはとあけし	一〇二	つばきの色も	五一
すむ人もなき	七	なみなき見れば	四〇	いへごとの	二六	友をもとむる	三五
あをやまの	七四	いけみづに	一七二	いほながら	一七	うさぎとる	四二
いかにして	一七九	いさましき	一七二			うしのひく	八二

うすいたに	一六一	うみごしの	三六	えだしげき	四八	おぼしまの	二五
うすくこく	二二	うみづらの	二九	えだたれて	五九	おほうちの	一六六
うすものの	六七	うみやまは	一八〇	えだながら	一六二	おほかたは	一九一
うたげせし	二二七	うめがえに	二二五	えのうらの	一七六	苔にうもれて	四三
うちそ、ぐ	一五	うめがかを	六	おいがみは	一九九	夏のことろに	五三
うちたえて	一三八	うめのはな	六	おいびとの	四九	おほきみに	一七二
うちなびく	三二	かめにさ、せて	六	おいまつの	五七	おほきみの	一七二
みはたのきくも	三二	さかりもすぎぬ	六五	うつほとなれる	七	あつきめぐみに	二〇〇
柳のいとの	一〇八	たをるとみしは	四一	古葉のしたに	三	軍のみうた	二二
うちはなつ	一七五	雪にうもれて	七六	おくふかき	三	いであしまつと	四六
うちよせて	二〇一	うらかぜに	六九	おくれたる	三	おももの、爲の	二〇〇
うちわたす	一九七	うらなみに	六三	梢も見えて	三	千代田の宮に	二二五
うつしゑの	七〇	うらやまし	一五三	わが心より	九一	千代田の宮の	一五五
うづみびの	一三二	うるはしき	一八一	おこたりにて	二〇	深きめぐみに	二二
うづみびに	五八	うれしくも	一八二	おしやりて	一八四	みいつおぼえて	一七八
うづもれし	一五六	かぜしづかなり	二一八	おとせめて	一三六	みけしにそ、ぐ	八二
うつろひし	四〇	今日は晴れぬと	二一七	おとゞより	一五八	みそのたづも	六四
うつわらの	一六二	ともにみその、	三六	おとにのみ	八〇	みふねすゞしく	二二
うまくるま	九二	うゑそへし	一三一	おなじころ	八〇	みやろは遠く	五〇
うみくがの	一六九	うをすくふ	二〇〇	おのづから	一九一	おほけなき	一九七



おぼしめす	一八〇	うちもしめりて	一二二	いふこと道に	二〇	かぐはしき	一〇五
おぼぞらの	一三二	おりどの近く	六八	思はぬ事も	五九	かくれいは	一六七
おぼぞらも	七二	玉のすだれの	六四	なくてぬる身は	四八	かげたかき	九三
おぼぢゆく	九六	とばりもしめる	二六	おやのため	一八	かげもなき	八八
おほふねの	四一	軒のしらかべ	一七三	かへす山田は	一八	かさなれる	一三七
おほまへの	一〇〇	軒端の雪も	三六	ひるげをはこぶ	一三八	かすそひて	一六九
さぶらひたらば	一〇〇	軒ふかけれど	九五	おやもこも	一六三	かぜあらし	一三二
さぶらひながら	一六二	火桶のもとも	一〇七	おりたちて	三九	かぜあらく	一三三
さぶらふとみる	一九五	みはしの梅も	五一	おりてもと	二六	かぜかよふ	二二九
まありおくれぬ	一九八	みはしの月に	五五	おるはたの	二〇三	かぜごち	二二七
おほまへの	九五	みはしの月は	一七七	かゞりぎの	二〇	かぜさむき	二二五
玉のすだれも	一五二	をすのと清き	五七	あたりの霜も	二〇	かぜふけば	二一五
玉のみはちに	一九五	おほやけの	一八七	煙や空に	二二	かたつぶり	九六
みたなにすゑて	七〇	おほろよの	三三	かきくもり	三五	かちびとの	四三
おほみけし	七五	おほろがは	五二	かきくらす	一〇	かちびとも	一六三
おほみふね	八七	おましまで	四〇	かきつばた	七五	かなしさに	二二二
おほみやの	一三一	おもしろく	一〇八	かきねゆく	一六六	かなぢゆく	一六九
いらかの上を	一八七	おもはずも	七六	かきのうち	六六	かのしまは	一一三
うちいかならむ	五	おもふこと	一〇二	かきのみの	一八九	かはらやの	一一
うちにありても	一五九	ありとも見えず	一四	かざりありて	二四	かひがねの	一八二
うちにきくだに	一五九	あればありげに	一四	かざりなく	九	かひならす	三八

かへります	三二	春いかならむ	一〇九	身はたなしらざ	六〇	くにといふ	二二
かへりみて	一三	窓の夜嵐	一〇七	をらむとすれば	二二	くにのかぜ	一三
かへるとも	四九	きこえあぐる	一六五	きみがへむ	一八三	くにのため	一六七
かみがきに	一七五	きこしめす	一九八	きみとおみの	四	いたでおふ身の	一五八
かみかぜの	九七	こと多ければ	一四九	きみのます	六	いたでをおひし	一
かみだなに	一八三	ことをはりし	一四九	きみをおもふ	一八二	いでます御代の	一四六
かみやまの	一五六	きせがはの	一八一	ち々のおもひの	一四五	海にくぬがに	一四六
かみよより	九三	きたびさし	一四七	まことの道の	二五一	事しあらばと	三八
かむあがり	一一二	きてみれば	一一九	誠ひとつに	一六八	科戸の神も	二四六
かむだから	一六四	きのふかも	一〇三	きよらなる	二四九	すてしこの身を	二五二
かめにさす	一三三	きのふまで	九八	きりあめに	二二九	一たびたてし	一八五
かみがはの	一六〇	きみおみの	九五	きりこめて	二二	くめまひの	一六〇
かやぶきを	一九一	たゞしき道も	一五	暁くらし	五六	くものうへに	一八六
かやりの	八九	道明らけき	九七	見るものなしと	一一九	つらなる星の	一八六
からくさの	一九七	きみがため	九七	きりはれて	六三	星をつらねて	八
からごろも	七四	雨にぬれつゝ	二二三	くさとりし	六六	くものうへの	二四九
かりそめの	一九二	えらびて折りし	九九	くさふかき	四七	くもまより	一九〇
ことは思はで	二四	心つくして	一八六	くさもきも	一六三	くももなく	二一五
露の上にも	一五六	心をつくす	一八六	くしのはに	二〇一	はれたる空を	一八
ありとも見えず	一〇	こまむかへむと	九五	くにたみを	一四〇	はれたる月に	一五八
軒端をあさみ	一〇	しぶきにぬれて	八八	あはれみたまふ	四	くゆらし、	三〇
		つまむと野には	六〇	すくはむ道も	四	くらからぬ	三〇



くらぬある	一三三	音にねぞめて	一八九	このあした	二〇〇	さきにほふ	六八
くらぬやま	一七	風にかたよる	九〇	このうちの	一二五	さきみてる	一〇
くるまにて	一五二	ふきしく庭の	二〇三	このうちを	四四	さざりたつ	三七
くるまひく	八八	こゝちよき	一一七	このけしき	一七四	さくはなの	三九
くれたけの		こゝろざす	一一八	このはみな	一一五	さくらぎに	一五八
葉山の海は	二〇二	こゝろして	七一	このはるも	六六	さくらさく	一二六
葉山の宮に	一四三	こゝろのみ	三三	うたげすぎぬと	六六	さくらちる	一三七
ほどよきふしを	三	ことしあらば	六〇	みゆきにあはぬ	一三六	さくらあつ	七三
くれなるの	一七三	ことしおひの	一〇八	このまにも	一〇〇	さゝえとる	一三四
くれなるも	二七	ことしげく	一九二	このやどの	二五一	さゝげたる	一五三
くれぬとて	一七	ことしまた	一六〇	こむとしの	九〇	さゝげむと	一二三
くれぬまに	一九二	ことしより	七八	こむとしも	五八	さゝげもつ	一二四
くろかみの	一九四	ことなくて	九六	こよひまた	一九一	さゝのはに	四二
くろかみを	一一六	くれゆくとしの	一三七	さかえわたる	一五五	さしのぼる	二〇八
くろくもの	一八二	くれゆく年を	一七七	さがえゆく	一三五	朝日のどけき	二五
けさみれば	二七	今年となりし	一七	いがきの松に	一八五	月の光は	一七
けさもまた	九九	ことのはの	二二八	老木のまつは	二五一	さつまた	一三一
けふまでに	一四四	露のそはぬが	六三	御苑の松に	一九五	さとかぐら	七九
けぶりぐさ	九一	道しる人に	一七六	さかきばの	二九	さとのこが	六三
こがひする	六七	道のたかねを	一六五	さかりぞと	一八九	拾ひのこし、	六三
こがらしに	一九〇	ことわざに	一三九	さきつゞく	四六	椋の實ひろふ	六九
こがらしの		こにまごに					

小笠あむなる

さとのこに	五九	しぐれする	二九	しもむすぶ	三七	すゝみせし	二〇三
さとのせし	五一	しげりあふ	一七八	しもをへて	二五〇	すゝみゆく	二〇
さはるか	一三五	しげりたる	八四	しらかはの	一〇八	すだくかの	二二
さびしきも	一四二	しゞみとる	四九	しらぎくの	四八	すみしよに	一五二
さましゝの	二四	したかげに	三三	しらくもの	一五九	すみなれし	一二四
さみだれの	一八五	したしくも	一一二	しるしらぬ	九	すみにごる	一二三
さむきよに	六八	しづがあらふ	六四	しるひとの	七一	すめらぎの	八一
さむしろに	二八	しづかなる		しろしめす		すゑおきて	一五五
さやかなる	一六九	心にも似ず	一三四	大御國內に	四四	すゑつひに	八一
雪居の月に	二五	やどにすめども	三三	國ひろまれど	一八六	すゑとほき	一七
聲こそこのこれ	二五三	世のとしなみは	一四四	國やすかれと	一五四	せきいれし	一四三
光をつゝむ	一八二	しづけさに	一七二	み國のうちと	一九五	せみのこゑ	六六
さやかにも	一八二	しづのめが	一五二	しろたへの	一〇三	そこのしく	六七
さやけさに	一八二	米とぐ桶に	一七九	麻のふすまの	二	そだて、し	一五七
さよふけて	二四	手にまかせぬる	一四	衣のちりは	二	そでがきに	三八
さらにまた	六九	しばしとて	一三六	しろのかげ	一一一	さく朝顔の	六八
しきしまの	二五三	しひしばの	七八	すきかへし	一五三	勺へる菊は	一八
大和心を	一七五	しまかげに	一四	すぎたるは	一六一	そのもりが	二八
やまとことばの	一四七	しもさゆる	一一三	すぎぬれば	二	うゑしかきねの	一〇一
やまと詞を	一四	しもふかき	五八	すぎむらの	七九	よせし木の葉を	一六二
しきわたす	五三	しもふりて	七〇	すゝなさく	一〇四	たうげにて	一一九



たえまなき	一三八	たづねいる	四〇	この大御代に	一八〇	つききよみ	二二四
たえまなく	六二	たなごこの	一四二	恵のつゆの	一八七	つきたかく	二二四
たかせぶね	七九	たはがはの	一五七	たらちねの	四〇	つきならで	二二五
たかどのに	九四	たにはたに	一六〇	今もいまさば	四〇	つきにひに	八三
たかねより	七〇	たねまきて	一六八	おやのいまさば	一四五	ものおもふことの	一七九
たかやまの	三	たのもしき	一三五	おやのみかげも	七二	よむふみ多く	一八〇
たきのうへの	一五一	たびごろも	一三九	袖にすがりて	四八	つきにふく	二八
たぐひなく	六四	たびびとが	一三六	庭の教を	七四	つきのわの	二二
たくみなる	一九六	たびやかた	一三九	たらちねは	五〇	つきふけて	二二
たくみびと	一一〇	たへがたき	一八二	ちか、らば	五五	つきをみし	六五
たけがきに	一九六	たまくしげ	一九二	ちかづけど	九七	つきをみし	五五
た、かひの	一六八	たますだれ	六八	ちぐささく	二四	つくしぐし	七
かちのたよりを	一六七	おろしこめたる	八七	ちはやぶる	一七五	つくろひて	八四
友のかばねを	一七〇	なかばか、げて	八九	ちよふべき	二五二	つたへこし	一四〇
た、かへば	二	たまだれの	三三	ちりかゝる	一〇九	つちもまだ	八
たちいでて	一三九	をがめのきくの	八九	ちりつめる	一四九	つ、じばな	二二
たちならぶ	七二	をすのうちに	一八九	ちりそめし	六一	つ、あづつ	二六
家より上に	七二	をすのひまもる	一七七	ちるうきも	三七	つはもの	二二
軒しなれば	七三	たまものの	九八	つかさびと	七二	つみたため	一三七
たちのぼる	二四	たみくさの	三〇	つきかげの	二六	つみとりし	一三〇
たちばなに	二八	たみのため	三〇	つききよき	一三四	つみのこす	四七
たづなとる		ためしなき				つゆはらふ	五六

つゆふかき	九二	ところせき	一一〇	とほくゆく	四一	なすことも	二二
つゆむすぶ	四七	としごと	五	ともしびに	一七〇	なつかしく	一九三
つりびとは	一一三	としたちて	一四七	ともしびの	九〇	なつぐさの	六二
つるのはの	一六八	はれのおものを	一七七	かげかすかなる	五二	ふかさしられて	四七
つゑつかで	一三三	松もよろこぶ	一九六	ともしびを	一六七	なつこだち	一六二
てすきびに	一四八	としたらで	一四七	ともしびを	六五	なつごろも	八
すみれの花を	八九	としとくに	四四	ともすれば	八一	なつふかき	二二八
折られざらなむ	九二	としをへて	一四四	ともとみる	四五	なつふかみ	七六
駒あらしひも	一一〇	とつくにの	一三九	とよとしの	一九三	な、くきに	一一三
弓矢とるにも	九二	ふみのはやし	一四	とりいでて	一八三	なにがしの	一九〇
てるつきに	一六三	まじらひ廣く	七二	とりとくに	三	なにごと	三三
雲のかゝるも	四八	と、せあまり	一六四	とるふでの	一五四	なごりある世を	一六八
白く見ゆるや	二四	となりにて	四八	ながかぎの	一四五	皆うちすて、	五四
てるつきの	一六	となりより	一〇六	ながからぬ	一九四	なにとなく	一五一
とききぬと	六一	とねりらに	六六	ながからむ	六二	なにのなへ	一七〇
ときしりて	一八七	とのあびと	一五九	ながれゆく	一〇四	なはしろの	一九八
ときならぬ	三二	ねしづまりたる	五	なきそむる	八	なへうゑて	一九二
車はすぎぬ	三二	とばのうみの	八〇	なくせみの	一三四	なほざりに	八二
煙となりし	五四	とひきたる		なごりなく	一三六	なみかぜに	二二
しほむを惜しと						なみかぜも	五〇



なみたかく	一六三	ねぎごとは	二二六	はなちりて	一四〇	ふる葉まじりの	二七
なみた、ぬ	四六	ねこのこを	一五五	はなになれ	一三九	はるのひの	一七二
なみのうへに	五二	ねぬるよの	九〇	はなのとき	一九三	はるふかき	八七
なれにけり	六一	のきたかく	一〇〇	はなのはる	二	はるもまだ	四二
にぎはへる		のきちかき	一九〇	はなのもと	四六	はる、かと	一三七
民のかまどの	二二四	のきにほす	九六	はなはみな	一六五	はれわたる	三三
都大路を	一四六	のきふかき	二二八	はなみつ、	五四	ひえどりの	八四
にしのうみの	二〇	のどかなる	三三	はなもみぢ	二二四	ひがひとる	一七八
にしやまを	一六四	のるこまの	二二	はにたかる	一〇一	ひかりある	五二
にはざくら	三三	ひづめの音は	一〇四	はになりて	一四二	ひかりをば	一七
にはつくり	二九	道しる人は	一九五	はねてまり	九七	ひざかりは	六三
にはとりの	一三三	のるひとは	三六	は、そばの	一七〇	ひとあしも	一一
にはながら	一四七	はこねやま	一〇〇	はらからの	二〇	ひとかたに	一八
にひごろも		はしちかく	二〇一	はるかぜに	四	なびかしつべき	一一三
いまだ着なれぬ	八八	はちすばの	二四	なびき、て	七	ひとくんだり	九二
袖せばければ	五八	はちながら	一	なびく、と	四〇	か、らましかば	二
にひしほり	八五	はつかりを	二八	はるかぜの	七五	しづけからぬや	一九二
にひみやに	九〇	はつしもの	九九	はるさむき	一四七	ひとごとの	二二
にひむろに	一九	はつはなの	八〇	はるさめの	三三	ひとしれず	六七
にほひなき	七二	はなすぎし	三九	露ふきはらふ			
ぬぎかへて		はなちらす					
ぬるがうちに	五四						

思ふこゝろの	一九	ひよりまつ	九四	ふづくゑは	一〇七	友のかきねに	六二
浪の花とも	一六	ひらけゆく	二五〇	ふでとらぬ	一五三	春なつかしみ	一六一
ひとすぢの	一七	まなびの窓の	七三	ふでとりて	一七四	春にこゝろの	四五
ひととして	一五八	御代にあひても	一〇八	いろはならひし	二二〇	をさなあそびの	一三二
ひとなみに	二〇	ひろしまの	九三	うつせるよりも	八三	へだてなく	八四
ひとのため	八二	ひをあげて	九六	ふなのへの	一〇三	ほそどのに	一九六
ひとはた	一三四	ふかみぐさ	五三	ふねのうへに	一五	ほと、ぎす	九四
ひとみな	一五〇	かをるまがきの	一七二	ふねのなの	六〇	なくひとこゑに	一七三
ひとむらの	二〇四	ましろにさくが	一九九	ふゆごもる	一七四	はつこゑき、し	七六
ひともの	四九	ふきわたす	一四三	ふりしきる	四三	まつもわりなし	四三
ひとよのみ	四六	ふきわたる	一九九	雨にたゆまず	一三七	三こゑ四聲は	一四一
ひとよりも	八四	ふくかぜに	一四九	雨もいとほで	一〇	ほの、と	一四六
ひとりきく	二九	よそのもみぢも	一一	ふりつゞく	二〇〇	あけゆく窓の	一三四
ひにみたび	一三五	ふくかぜは	一四九	雨はれそめて	二〇〇	夜はあけぬらし	一七九
ひのもの	八三	ふくかぜも	一四八	雨をいぶせみ	一一〇	まがねしく	六五
うちにあまりて	一八五	ふくかぜを	八	ふりつもる	一七	まくらべの	六二
くにとまきむと	一八六	ふけぬとて	一四一	ふるあめに	四六	まご、ろを	六四
くにのさかえは	一九七	ふししぼの	一一	ふるごとを	二〇〇	まさかきもて	二二〇
くにひろごるの	二六	ふじのねは	一〇六	ふるさとの	一四四	まさかきに	一三五
さかひはなれて	一九	ふせごより	五五	車やどりに		かくる鏡の	
恵の露に							



しでたるきぬも	一四一	みうらがた	一六七	まつの葉白く	九八	露おきあまる	二八
まさりゆく	一〇七	みがかずば	二	松より上に	九〇	みやぎのの	三〇
ますらをが	一六〇	玉の光は	二	みそのふは	一九七	みやこびと	九七
まつがえに	一九	玉も鏡も	二四九	みそのより	九九	みやつこの	二九
まつりごと	五二	みが、れて	七二	みだるべき	三	みやのうちを	三〇
いとまある日と	三三	みかきもる	二〇〇	みだれけむ	一八	みやびとの	二六
しげきあしたの	一六	みかづきは	一〇一	みちすがら	一八〇	みゆべくも	二二
まつをこじし	九二	みくるまの	二五	みちのくに	一	みるかざり	一七八
まひのそで	一六九	みくるまを	三八	みつかひを	一八七	みるごとに	一四六
まもらし、	一六九	みこ、ろに	三七	みづきよき	七四	みるひとの	四一
みいくきの	一四〇	みこしぢの	二九	みづひかぬ	二〇三	みるめなき	四九
たよりいかにと	一一	みそなはず	九八	みつるぎの	二二	みをつみて	四
ふねにやどりし	一五三	ひまだになくて	二	みつゑとも	一六四	むかしいま	八二
船よりふねに	一七五	弓矢のわざぞ	二	みとらしの	一五	むかしより	一六五
道につくし、	二二五	みそのふの	九	みなとえは	六一	むかしわが	五五
みいけには	二四	池の蓮葉	一八	みなびとの	三三	野をうらやみて	一五五
みいたづき	二〇二	菊はさかりに	八九	みにおひし	一七四	實を拾ひてし	一〇六
みいとまの	七二	菊をおきては	四四	みになれる	一九四	むしのねぞ	一九
みうたげの	一一	たづの風きり	二二	みねたかき	一三八	むつまじき	七三
なきをしりてか	五二	花はかはらぬ	一九八	みめぐみの	一五四	むらぎもの	九五
ほどちか、らし	九	花はさげども	一四二	あまりある身を	四二	心にかゝる	七三
みうまには		花見る友は		雨とはしれど		こゝろにとひて	

むらさめに	三四	やきすてし	一八	花にさへづる	六〇	ゆきてみむ	四二
むらさめの	一〇四	やちくその	一九九	ゆふべきびしき	五八	ゆきふかき	五二
めづらしき	八五	やつかほの	一八〇	やまとほき	六一	蝦夷が千島に	一七二
めづらしと	七七	やどちかく	一四四	やまのなの	一五	樺太島の	一八
るちのよの	一六八	やぶれがさ	一三三	やまばたの	五六	ゆきわけし	七三
もつひとの	七二	やまあひに	一三三	粟のたり穂の	七八	ゆくひとを	一三三
ものごと	七三	やまかげの	一三二	そばの花ふく	七六	ゆくふねの	九
ものごと	六四	岩根によりて	一九四	やまびとも	六九	ゆくふぐれの	一〇〇
もの、ふの	一一	庵のめぐりの	一五〇	やまひめの	二八	ゆふされば	三四
ものまなび	二二〇	庭のいはがき	一九一	やまふかく	一三五	ゆふしほの	一一五
ものまなぶ	八四	水のながれは	一五七	やまぶきの	三二	ゆふだちの	八八
もみぢばの	一一	やまがつか	一八八	いはぬ色なる	五四	ゆふだちは	六七
もみぢばな	二二九	せどのもろこし	一八四	見えしあたりか	四九	ゆふづきの	三六
もみぢやま	二〇一	軒の松がえ	一八四	やままつの	四二	ゆふづくよ	五三
も、とせを	二五一	やまがはの	一一	やまもりの	一四二	かすかに聲の	一〇五
千年の坂の	一六四	うすき氷を	一五七	つ、の音すなり	一三〇	さすにまかせて	七六
ふもとに見つ、	一三	ながれをひける	一〇三	やまをなす	一八二	やなぎのかげに	二四
も、やまの	八二	やまがらの	一六三	やまをぬく	一七	ゆふつゆの	一八四
もゆるひの	一一二	かきねの夕日	一七九	やむひとを	八〇	ゆふひさす	一八四
もろこしの	一六六	せどの竹垣	一九二	ゆあみする	九四	濱のまさごに	一八四
畑のたかきび		つくらぬ庭ぞ					



窓につばさの	一八三	野分の風の	一四三	わがきみは	八八	波路さやけき	一〇六
わが庭ざくら	七五	よのほどは	五七	わかくさの	七五	船のしるべの	一八四
ゆふやけの	一五一	よはいまだ	一九〇	わがそでの	一〇	わびしとて	一〇
ゆめさめて	九四	よむふみは	一七四	わがたけも	一五六	われとむと	一三八
ぶあらしに	一〇四	よるなみも	一八一	わがために	七七	をぐるまの	
よきともに	一三九	よるのあめに	五三	わかなつむ	六	うちもわすれて	三五
よきほどに	一七八	よるひかる	一九	わがにはに	七七	まへをよこざる	二〇一
よこすかの	一五九	よろこびの	二五〇	わがにはの	七	右に左に	一七七
よしのがは	一二	よろづよと	一七五	池のかへる子	二八	をすの葵に	三七
よしのやま		よろづよの	七九	しらふのすゝき	一五〇	をさなごの	七二
しげるわか葉の	九三	かめ石にこそ	一七〇	すゝしき月に	一九四	をさめます	八三
みさゝぎ近く	九三	こゑぞきこゆる	一五二	紅葉見にだに	八九	をすならば	七
よつのうま	三四	こゑとよむなり	一一〇	わがにはも	三七	をすのとの	一〇九
よつのをの	五九	聲ひゞくなり	一一〇	わかばさす	一五〇	をとめこが	七一
よにたかき	八三	よはひを君に	一一六	わかばのみ	一一七	おなじことのみ	七二
よにとほき	二〇三	よわたりの	一〇三	わがまどの	一七三	春の衣ぞ	一四九
よにひろく	一九五	わがいはの	一一五	わかみどり	一八八	をやまだの	二二
よのなかに	一四六	わがかげも	二八	わすれては	一〇五	あぜにやすらふ	二二
よのなかの	一六〇	わがきみの	二〇二	わたつみの	七九	かゝしに弓は	一五
よのひとの	一四八	うぶゆとなりし	五六	わたどのの	九六	里のかきねの	一九八
よのほどの		ちとせの秋を	九二	わたのはら	一五二	しづがわらやの	一四四
嵐はたえて	一五二	御代長かれと				をりづるの	九一

をり〜は  
 ちる花見えて 一四八  
 翅も見えて 一三三  
 畑うつくはを 八二  
 ををたちし 一六



卷上

明治七年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	同十五年	同十六年	同十七年	同十八年	同十九年	同二十年	同二十一年	同二十二年
------	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	-------

計四五

一首	一四	四	六	八	二	二	二	一	二	三	二	五	三	五
----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

卷中

明治二十三年	同二十四年	同二十五年	同二十六年	同二十七年	同二十八年	同二十九年	同三十年	同三十一	同三十二	同三十三	同三十四	同三十五	同三十六	同三十七	同三十八	同三十九
--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

計四八

四〇	一八	二六	一〇	二二	一九	二四	四八	五八	二七	三三	四四	二九	二三	一八	一七	二五
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

卷下

明治四十年	同四十一年	同四十二年	同四十三年	同四十四年	同四十五年	大正二年	同三年	御文章	御唱歌	附載	御歌總計一〇九七	御歌計一六四
-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-----	-----	-----	----	----------	--------

大正十三年九月三日印刷  
 大正十三年九月五日發行

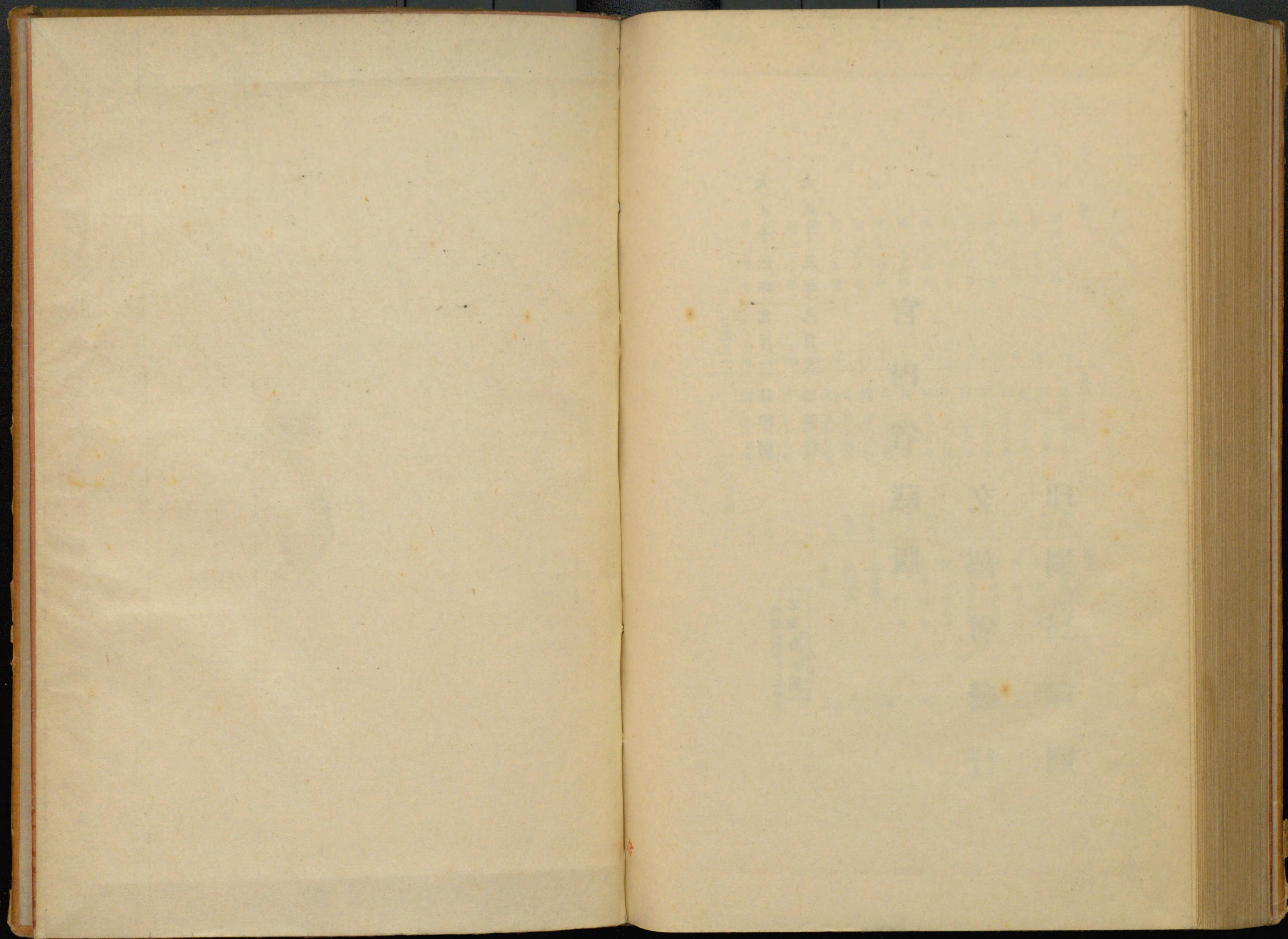
定價金貳圓

宮內省藏版

文部省發行

印刷局印刷



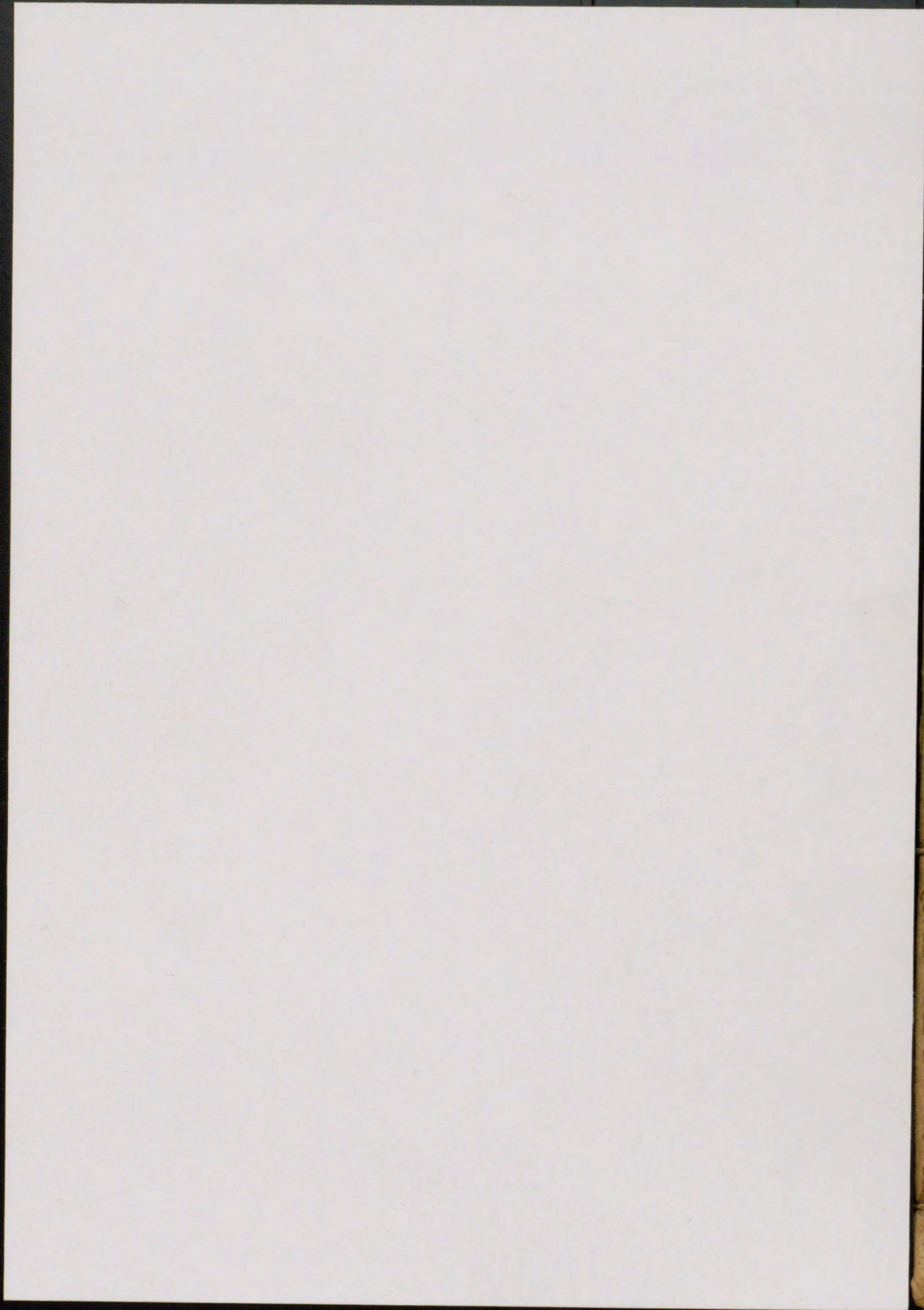




159  
181







陸

國

圖

書

館

藏